



巻 頭 言

1993年にあらためて思うこと

三井東圧化学株式会社 精密化学品事業部長 山口 富士生

平成5年の新しい年は晴れやかに明け、まことにすがすがしいスタートをきった。

昨年は政治、経済全般にわたり暗い面が目立ったように思われる。政治はおくとして、経済面では世界同時不況とか、バブル崩壊、複合不況とか、どこまで行ったら底に到達するかわからぬ深淵に引き込まれているかの如き感が強かった。また従来不況とは比較的縁遠かった業種までも履う深刻さである。新しい年は国内景気刺激策の奏功、米国景気の回復等により明るさをとり戻して欲しいものである。

経済界首脳、各社トップの年頭所感もこのような時勢を反映して、厳しい認識と対応を語るものが圧倒的であった。その中で長老の方々の「現状は厳しいが昔の不況と比較すればどうということはない。不況、不況と心配するより、やるべきことをしっかりやるのが肝要」との叱咤激励に、数々の修羅場をくぐってこられた迫力を感じた。

日本の農業について、その厳しさが語られてから久しい。いわく対外的には国際競争力不足、対内的には高令化、後継者不足等々。起死回生の即効的妙薬があるとは思えないが、昨年農水省により策定された21世紀に向けての新農政が逐次実施され、成果を挙げることを期待したい。新政策は経済的側面のみならず、地域振興政策とも関連づけられており、農業・農村が経済的にも、文化的にも活性化し、「豊かでゆとりのある」姿になって欲しいと切に願う。

地球上の人口はどれ位が適度なのか、どれ位まで持ちこたえられるのか、私にわかる筈のことではないが、全世界の人口は確実に増加しており、今後もその勢は止まらないという。地球

上に生を受けた以上、物質的にも文化的にも豊かになりたいと願うのは当然であり、食糧、エネルギーを始めとする諸物質の必要量は大巾に増加するであろう。

地球上のバランスからいえば、人口増加自体が問題なのかも知れないし、その対策こそ問われなければならないのかも知れない。さわさりながら、人口増加への備えも現実的課題として必要とすれば、地球環境の保全に及ぶ限りの配慮をしつつ必要な物資の確保に努めねばならないであろう。

食糧の確保、就中農業について上記観点から考えるならば、農業用地の拡大による増産よりも、土地単位当りの生産力を増加させる道を選択すべきであろう。

日本の農業は高度の栽培技術を駆使し高い生産力を持っており、水田は環境保全にも役立つこと大といわれる。このような日本農業こそ21世紀に向って再生しなければならないと思う。

農業資材を通じて農業にかかわりのある者として貢献できる道は、農業の生産力向上と地球環境の保全に“より高いレベル”で寄与しうる資材の研究開発を推進することであり、これが「やるべきこと」の第一と思う。

つぎに視点を変えるが、農業に対する誤解や曲解は依然として起っている。農薬の効用が無視ないし軽視され、極く例外的にしか発生しないトラブル面のみが強調されていると思われる。我々関係者一人一人がさらに農薬の重要性をアピールし、一人でも多くの理解者、仲間をつくって行きたい。これが「やるべきこと」の第二と思いを新たにしている。